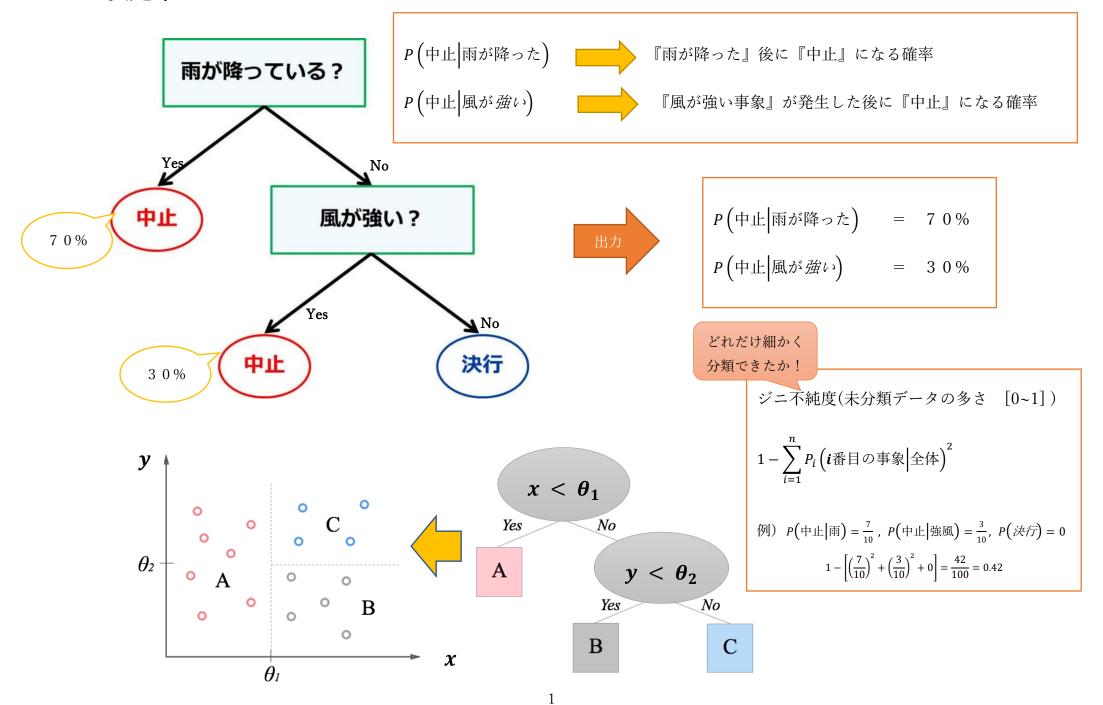
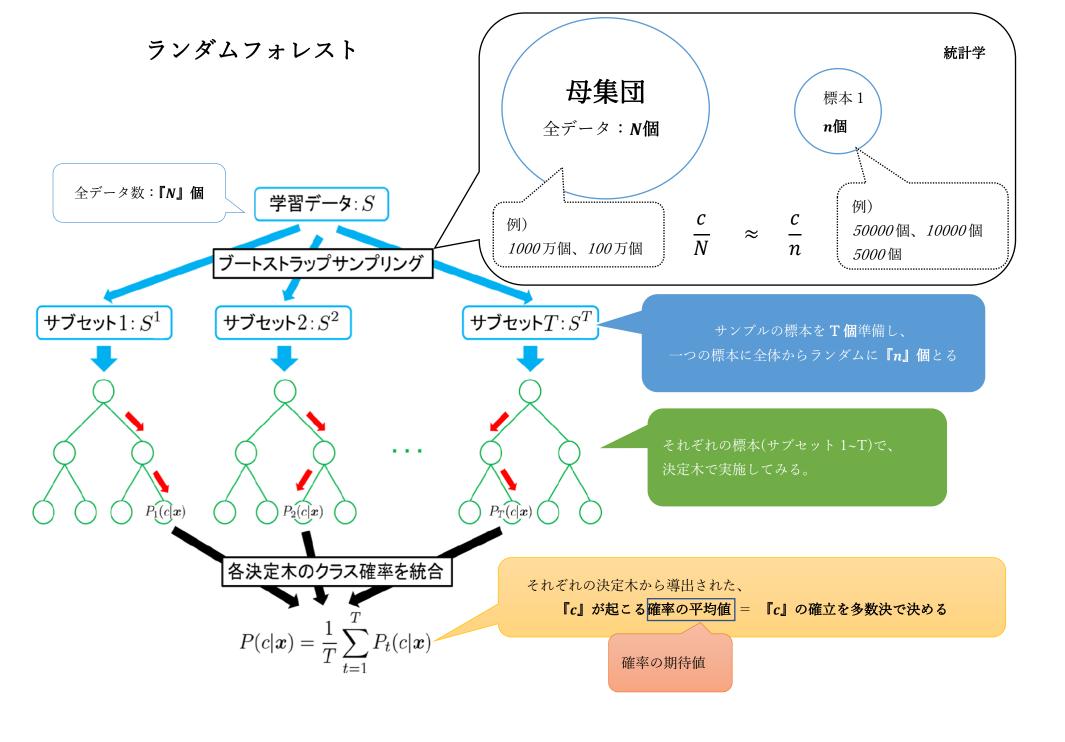
機械学習の入門講座!

大まかに分析モデルを理解してみる

決定木





決定木×ブースティング

バギング: 並列学習 ex) ランダムフォレスト

訓練用にサンプル標本をを複数作成し、それぞれ独立に学習させて平均や多数決を行い分類精度を高める手法。

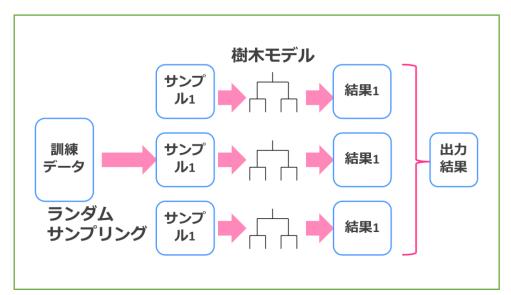
重要な葉だけ掘り下げる

ブースティング: 直列学習 ex) LightGBM, Xgboost 始めに弱学習器で予測を行い、誤分類のサンプルを訂正するように 別の学習モデルをどんどん追加して予測精度を高める手法

アンサンブル学習

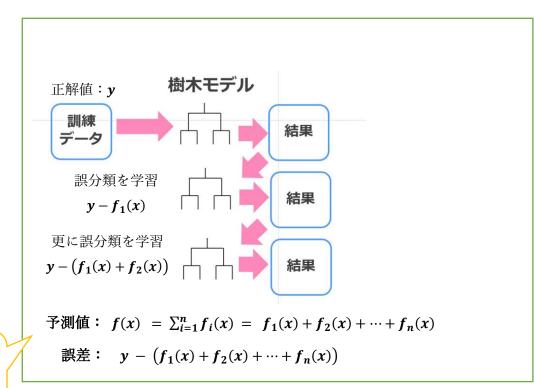
複数の学習器(学習モデル)を用いて学習する方法



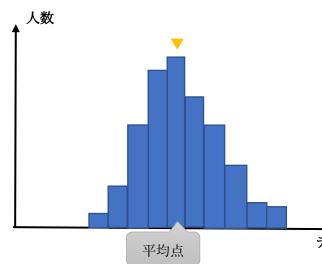


『LightGBM』や『Xgboost』は、 AI のコンテストでもよく使われる!

ブースティング



正規分布1

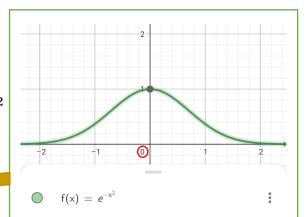


Y軸で回転させると...



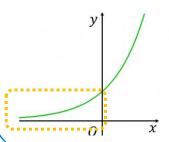
$$\ominus(\oplus\times\oplus)=\ominus$$

 e^{-x^2}



テストの点数

指数関数のグラフは指数が⊖の時に、 限りなく0に近づいていく。



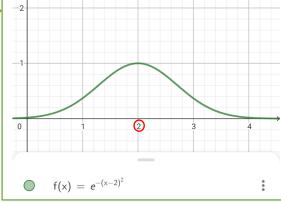
⊝乗は、中心から離れるほど 小さくなる。

$$10^{-2} = \frac{1}{10^2} = \frac{1}{100} = 0.01$$

$$10^{-3} = \frac{1}{10^3} = \frac{1}{1000} = 0.001$$

$$10^{-4} = \frac{1}{10^4} = \frac{1}{10000} = 0.0001$$





復習!

 $a^5 = a \cdot a \cdot a \cdot a \cdot a$

$$a^3 \times a^2 = (\underline{a} \cdot \underline{a} \cdot \underline{a})(\underline{a} \cdot \underline{a}) = \underline{a}^{3+2} = \underline{a}^5$$

 $(a^2)^4 = (a^2) \cdot (a^2) \cdot (a^2) \cdot (a^2) = (a \cdot a)(a \cdot a)(a \cdot a)(a \cdot a) = a^{2 \times 4} = a^8$

⊖乗が必要な 理由

0乗が必要な

理由

分子の指数を『2』減らす

$$a^{5} \div a^{2} = \frac{a^{5}}{a^{2}} = \frac{a \cdot a \cdot a \cdot a \cdot a}{a \cdot a} = a^{5-2} = a^{5} \times a^{-2} = a^{3}$$

 $a^5 \div a^5 = \frac{a^5}{a^5} = \frac{a \cdot a \cdot a \cdot a \cdot a}{a \cdot a \cdot a \cdot a \cdot a} = a^{5-5} = a^0 = 1$ $a^0 = 1$,



4個

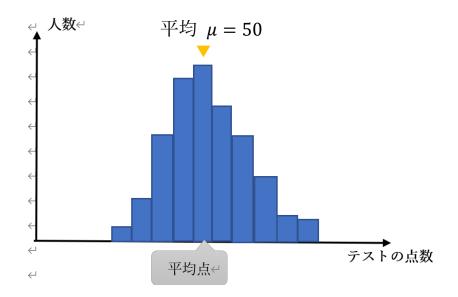
『ハンバーガー2個のセット』を4つ買う =全部で8個のハンバーガーを購入

指数が分数の場合

$$(a^{\frac{1}{2}})^2 = a^{\frac{1}{2}} \times a^{\frac{1}{2}} = a^{\frac{1}{2} + \frac{1}{2}} = a^1 \longrightarrow a^{\frac{1}{2}} = \sqrt{a} \qquad (a^{\frac{1}{3}})^3 = a^1 \longrightarrow a^{\frac{1}{3}} = \sqrt[3]{a}$$

$$(a^{\frac{1}{3}})^3 = a^1 \iff a^{\frac{1}{3}} = \sqrt[3]{a}$$

正規分布 2



ある人の点数

平均点

分散 $(\sigma^2) = \frac{1}{n} \sum_{i=0}^n (x_i - \mu)^2$

→『中心からの差分』を平均したもの

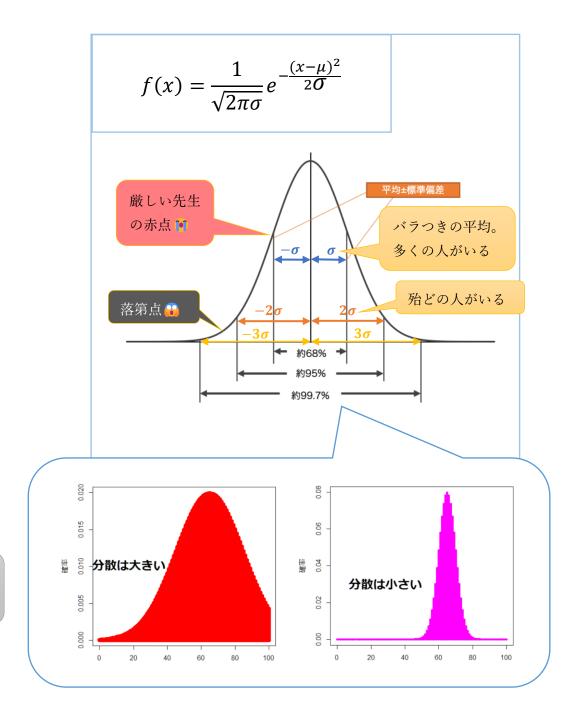
分散を root で囲ったものを**標準偏差(σ**)という

$$\sqrt{\sigma^2} = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=0}^{n} (x - \mu)^2}$$

二乗から戻したイメージ。

『バラつき度合い』

を平均したもの

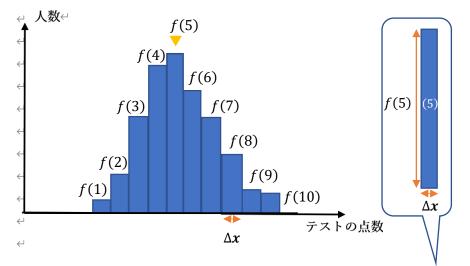


正規分布3

関数の値が高いところほど、多くのデータが存在 = 『確率の分布を表している』



しかし、関数は連続量なので、 $0\sim100$ までに無限に値が存在する。50 点をとる確率は、 $\mathbb{C}_{1/\infty}\approx0$ 』となり 確率を扱えない。そこで、下の最初のテストの点数の分布のグラフを見てみる。



全体に対しての平均点グループ『(5)』(50~60 点)の割合は、**短冊の面積**で考えると

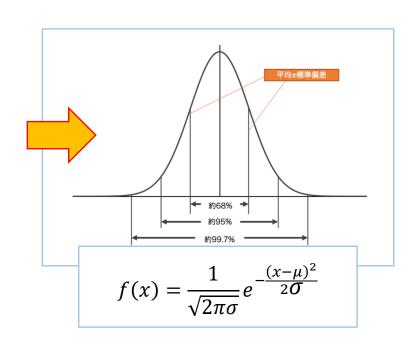
$$\frac{f(5) \cdot \Delta x}{\sum_{i=1}^{10} f(i) \cdot \Delta x} = \frac{f(5) \cdot \Delta x}{f(1) \cdot \Delta x + f(2) \cdot \Delta x + \dots + f(10) \cdot \Delta x}$$

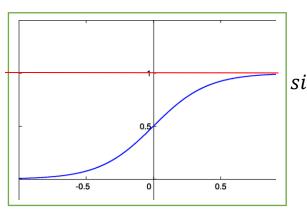
となり、面積で考えると割合を定量的に扱えるようになるのである!

このように、連続量で表すガウス分布でも、面積で考えることで、 確率を扱えるようになるのだ!

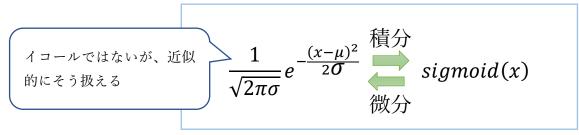
ガウス分布では、下記のように1になるように面積を定義している。

積分で『1』に
$$\frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma}}$$
 $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma}} dx = 1$





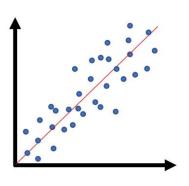
 $sigmoid(x) = \frac{1}{1 + e^{-x}}$ $0 \sim 1$



回帰分析

単回帰

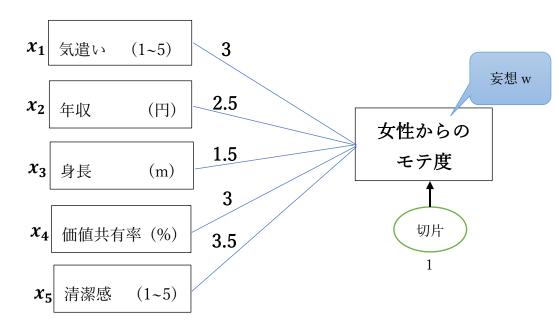
$$y = ax + b$$



重回帰



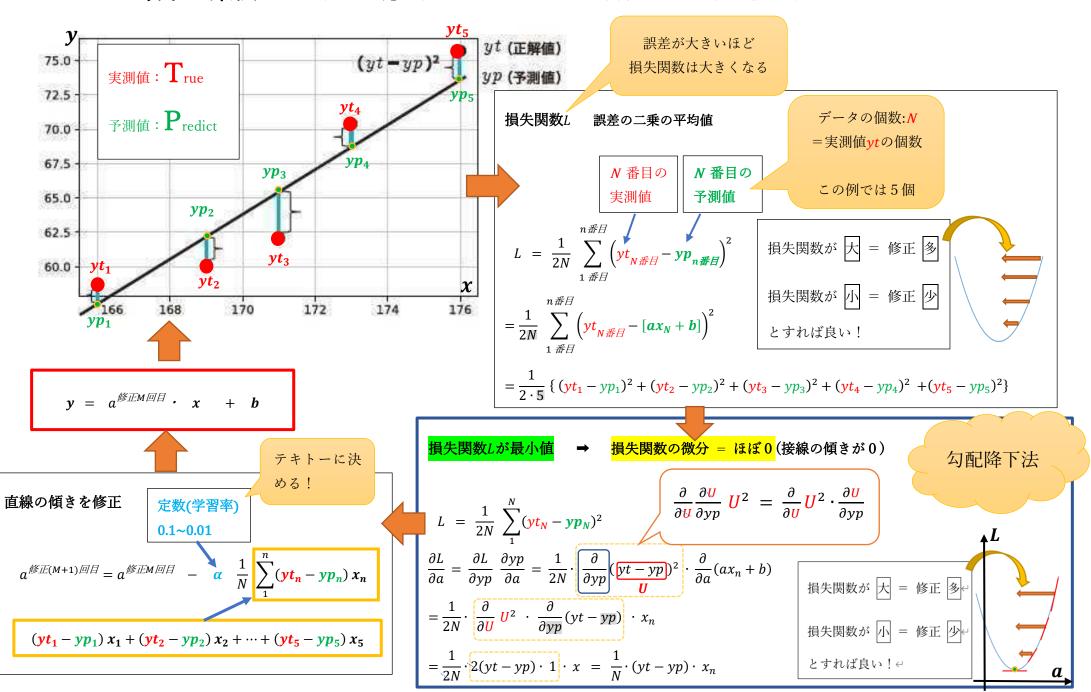
家賃: $y = -2823x_1 + 1567x_2 - 1380x_3 + 95200$



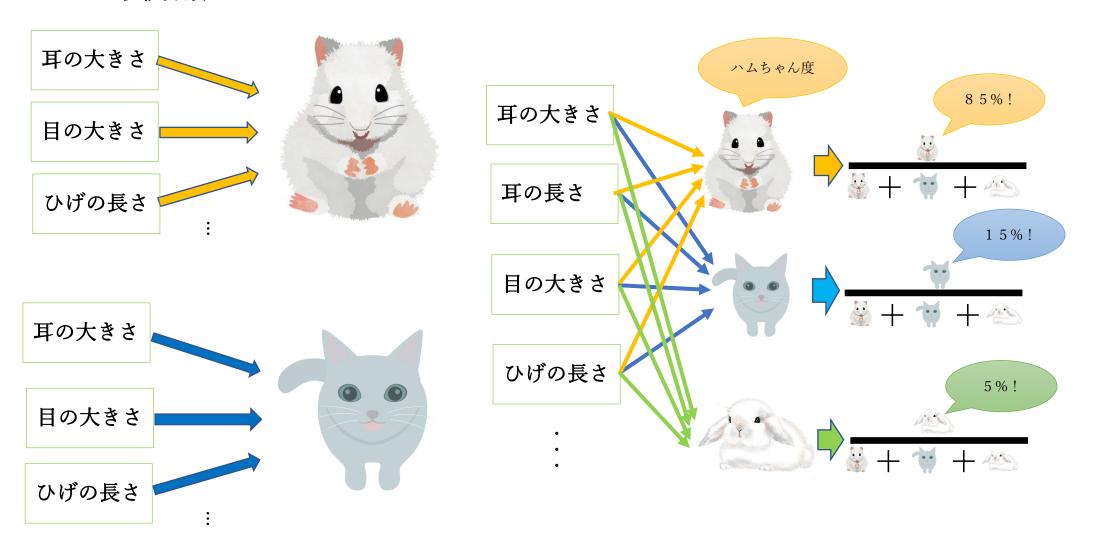
モテ度:
$$y = 3x_1 + 2.5x_2 + 1.5x_3 + 3x_4 + 3.5x_5 + 1$$

最小二乗法

: 「誤差の二乗」が最小になるようにしていく時の性質を利用して、最適な傾きを求める方法

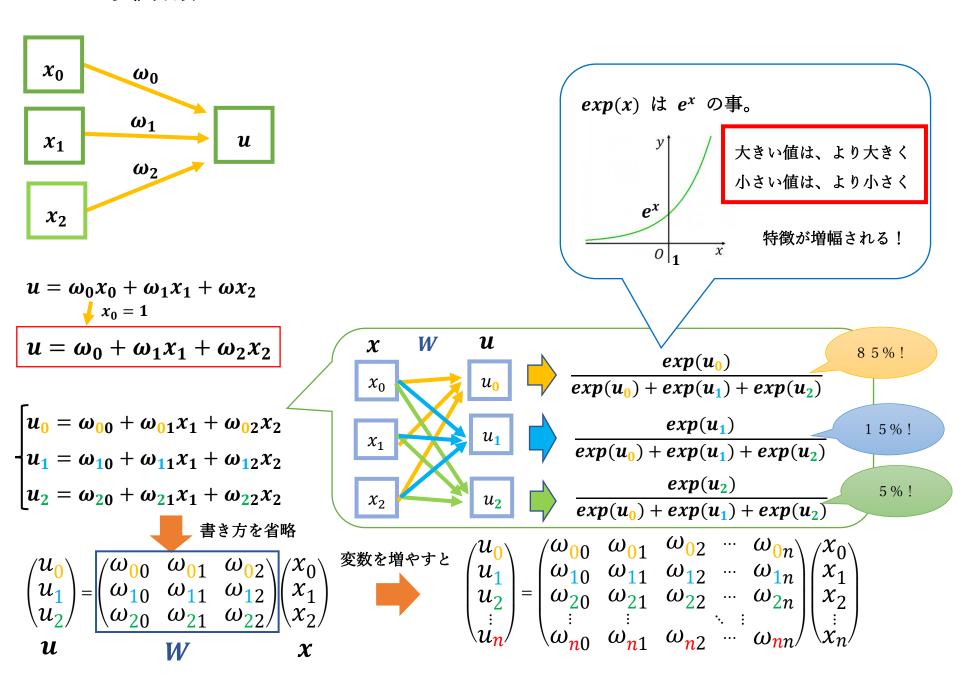


多値分類1



その動物の度合い = 【目の大きさ】+【耳の大きさ】+【ひげの長さ】+ …

多值分類 2



多值分類3

$$u = Wx$$

$$\begin{pmatrix} u_0 \\ u_1 \\ u_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \omega_{00} & \omega_{01} & \omega_{02} \\ \omega_{10} & \omega_{11} & \omega_{12} \\ \omega_{20} & \omega_{21} & \omega_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} u_0 = \omega_{00} + \omega_{01}x_1 + \omega_{02}x_2 \\ u_1 = \omega_{10} + \omega_{11}x_1 + \omega_{12}x_2 \\ u_2 = \omega_{20} + \omega_{21}x_1 + \omega_{22}x_2 \end{pmatrix}$$

●SoftMax 関数

$$h(u_i) = \frac{exp(u_i)}{\sum_{i=0}^{2} exp(u_i)} \qquad h(u_0) = \frac{exp(u_0)}{exp(u_0) + exp(u_1) + exp(u_2)}$$

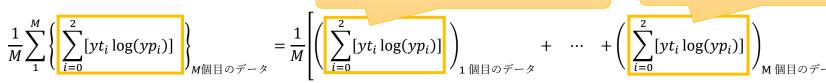
$$yp_i = h(u_i)$$
 , $yp_0 = h(u_0)$

●損失関数 L

 $\llbracket yt_i \log(yp_i) \rrbracket$ をエントロピーといい、熱力学の熱効率を計算する時に \llbracket 熱が発散し ていく度合い』を表す指標として導入されたが、経済や情報などの分野でも応用された。

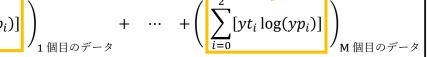
$$\sum_{i=0}^{2} [yt_{i} \log(yp_{i})] = yt_{0} \log(yp_{0}) + yt_{1} \log(yp_{1}) + yt_{2} \log(yp_{2})$$

$$yt_{0} \log(yp_{0}) + yt_{1} \log(yp_{1}) + yt_{2} \log(yp_{2})$$



$$\frac{\partial L}{\partial \omega_{12}} = \frac{\partial L}{\partial y p_{0,1,2}} \frac{\partial y p_{0,1,2}}{\partial u_1} \frac{u_1}{\partial \omega_{12}}$$



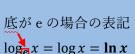


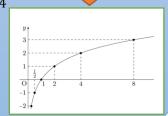
 $\omega_{ij}^{\text{FE}(k+1)\square\square} = \omega_{ij}^{\text{FE}k\square\square} - \alpha \frac{1}{M} \left(\sum_{i=1}^{M} (yt_i - yp_i) x_j \right)^{i}$

 $[\log_2 x]$ は、2 を何乗したら [x] になるかを示 している。

$$2^{2} = 4$$
 $\log_{2} 4 = 2$ $y = \log_{2} x$ $\log_{2} 8 = 3$

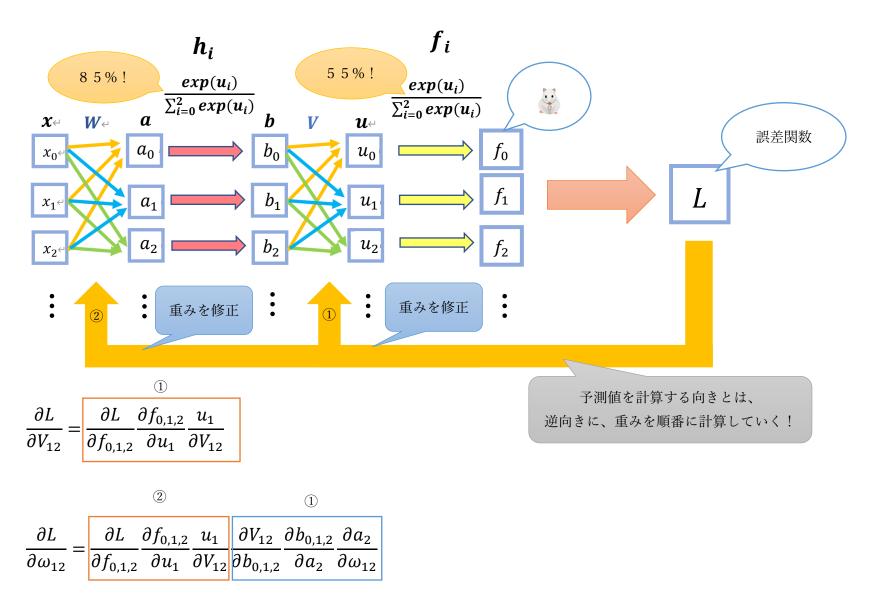
$$2^4 = 16 \quad | \log_2 16 = 4$$



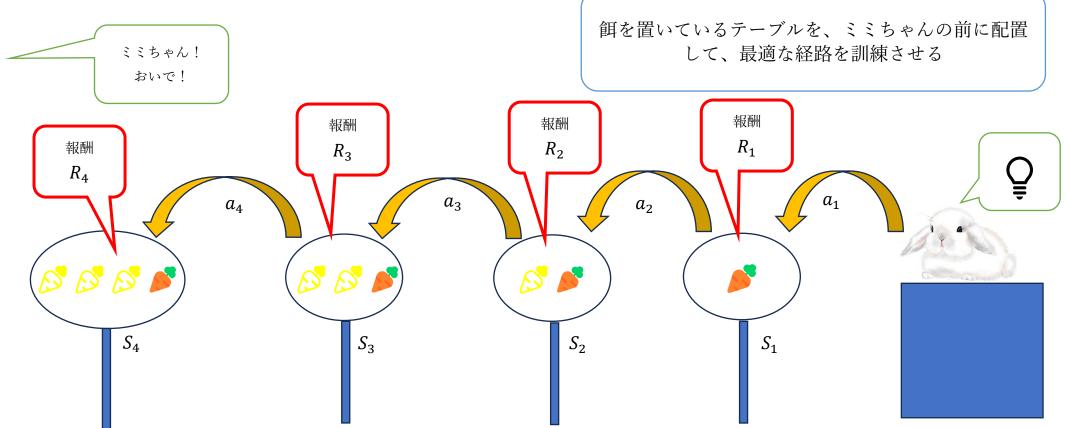


 $yt_0 \log(yp_0) + yt_1 \log(yp_1) + yt_2 \log(yp_2)$

ディープラーニングと誤差逆伝搬の概要



強化学習の概要



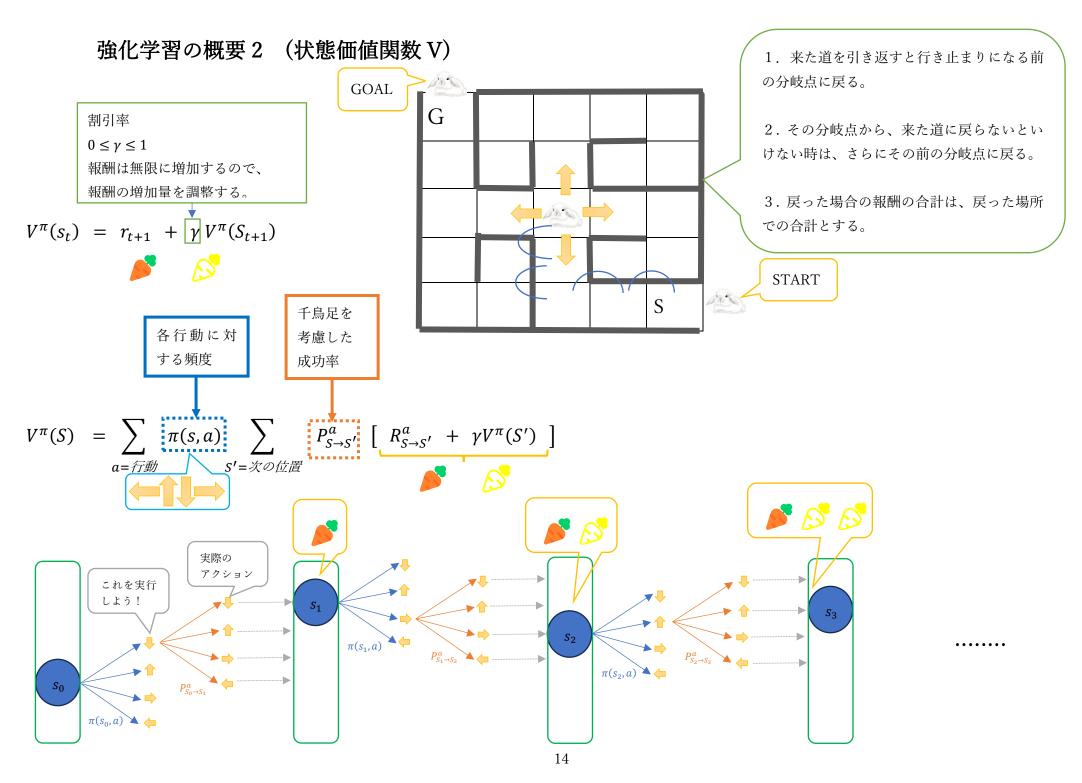
Status: 状態 Action: 行動 Reward: 報酬

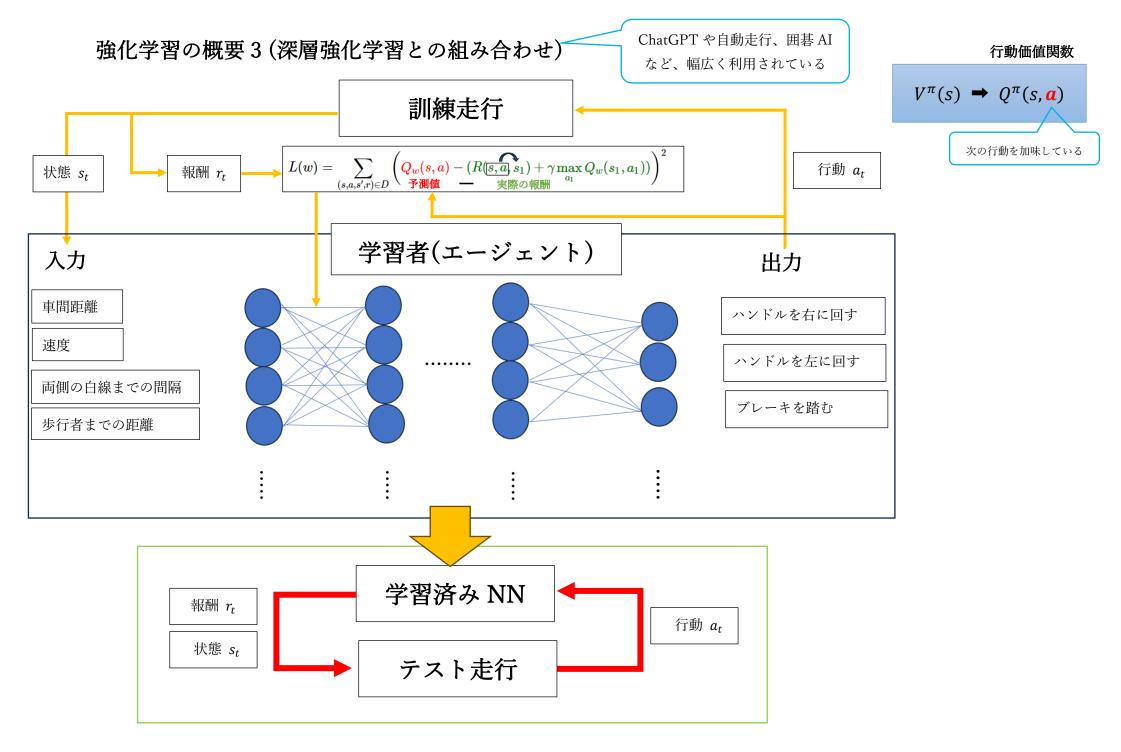
$$R_1(S_1) =$$

$$R_3(S_3) = + 2$$

$$R_4(S_4) = + 3$$

色々試してみて、たどった経路の中で、一番報酬を獲得した時の方策を採用する





k-means 法

0. データ数は n 個ある。

i = 1, 2, ..., n

- 1. クラスター中心となる点 Vg(重心点)を配置する個数 kを決める。 1, 2, ..., k
- 2. k個のクラスター中心となる点をランダムに配置する。
- 3. それぞれの座標 P_i (x_i, y_i) から、それぞれのクラスター中心点 V_g (X_k, Y_k) の座標までの距離を求める。

$$||P_i - V_g||^2 = (x_i - X_k)^2 + (y_i - Y_k)^2$$

4. 『3』で求めた距離の中で、一番近い中心に紐づける。 他の座標 P_i でも、同様にする。 $\min(\mathbb{R} - V_g)^2 = \arg\min((x_i + X_k)^2 + (y_i + Y_k)^2)$

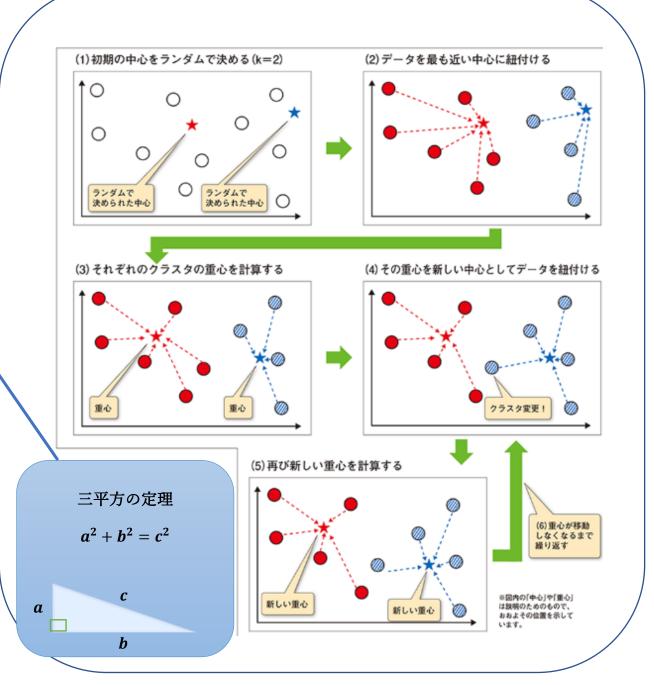
arg[条件式] で、**『条件式を満たすモノ**』と云う意味 argument; 議論、主張→ **論拠** →引数、偏角

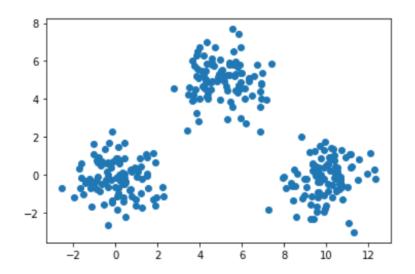
5. 『4』で分類されたグループの重心となる、座標を見つける。

クラスターの x 座標の平均値=
$$\frac{x_1+x_2+x_3+\cdots+x_n}{N}$$

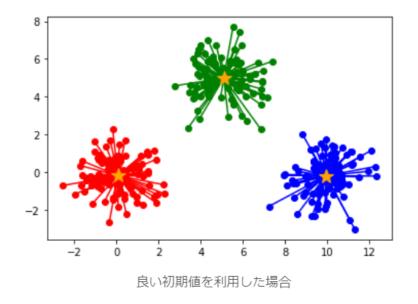
クラスターの y 座標の平均値= $\frac{y_1+y_2+y_3+\cdots+y_n}{N}$

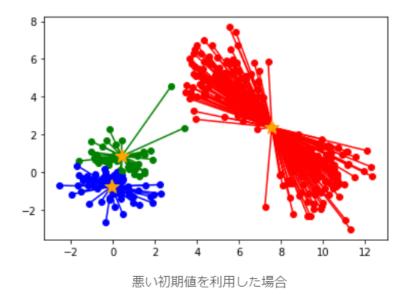
- 6. クラスター中心を『5』で求めた位置に移動する。
- 7. クラスター中心が移動しなくなるまで、『3』『4』『5』『6』を 繰り返し行う。





以下のように初期値によって、クラスタリングの結果が異なります。 (収束までの計算量も異なります)





k-means++ 法

0. データ数はi個ある。いくつのクラスターを作成するか決める。

i=1, 2, ..., n , クラスター数 = 1, 2, ..., k

1. クラスター中心を以下の式に従って算出し、決定してくいく。

データ同士の距離が遠い点をクラスター中心としていく。これをk個揃うまで繰り返す。 『下記の確率の式が高い点』=『点と点の距離が遠い点』

$$\frac{D(x_i)}{\sum_{1}^{n} D(x_i)} = \frac{\cancel{\text{Epik}A}}{\cancel{\text{Epik}A} + \cancel{\text{Epik}B} + \cancel{\text{Epik}C} + \cancel{\text{Epik}D}}$$

2. 『1』でクラスター中心をk個決定した後、そのクラスター中心をもとに 【K-means】の処理を実行する

●k-means 法

1. それぞれの座標 P_i (x_i, y_i) から、それぞれのクラスター中心点 $\operatorname{Vg}(X_k, Y_k)$ の座標までの距離を求める。

$$||P_i - V_g||^2 = (x_i + X_k)^2 + (y_i + Y_k)^2$$

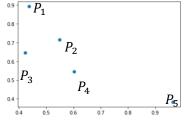
2. 『1』で求めた距離の中で、一番近いモノだけ線を引く。 他の座標 P_i でも、同様にする。

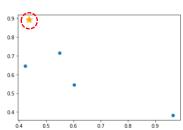
$$arg \min ||P_i - V_g||^2 = arg \min ||(x_i + X_k)^2 + (y_i + Y_k)^2||$$

3. 『2』で分類されたグループの重心となる、座標を見つける。

クラスター中心のx座標= $\frac{x_1+x_2+x_3+\cdots+x_n}{N}$ クラスター中心のy座標= $\frac{y_1+y_2+y_3+\cdots+y_n}{N}$

- 4. クラスター中心を『3』で求めた位置に移動する。
- 5. クラスター中心が移動しなくなるまで、『1』『2』『3』『4』を繰り返し行う。

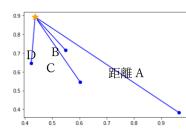




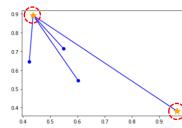
0. このデータ点を例に k-means++ を説明

 $P_{1}(x_{1}, y_{1})$ $P_{2}(x_{2}, y_{2})$ $P_{3}(x_{3}, y_{3})$ $P_{4}(x_{4}, y_{4})$ $P_{5}(x_{5}, y_{5})$

1. [データ点] からランダムに 1 つ選び、[クラスタ中心] とする



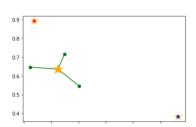
- 2. [データ点] と [一番近いクラスタ中心] の距離を求める
- ※複数の [クラスタ中心] が存在する場合は、 一番近いものを1つ選択



3. 距離が遠いデータ点を選ぶ (確率が高い)

※各データ点が選ばれる確率は以下

 $(データ点の距離)^2/(各データ点の距離の合計)^2$



- 4. k 個の [クラスタ中心] を選ぶまで、2,3 を繰り返す
- 5. k-means 法で k 個のクラスタリングを行う ※ここからの手順は k-means と k-means++ で同じで